

秦の始皇帝

陳舜臣『ものがたり史記』（朝日文庫、一九八三年）

河南省の鄭州市から武漢にむかう鉄道を、約百二十キロあまり南下したところに、漯河市があり、さらにその東南数十キロの地点に上蔡というまちがある。

戦国末期、ここは楚の領域であった。

上蔡の役所に勤めていた李斯という青年は、倉庫の点検に出かけるまえに、便所に入った。

「あつ、びっくりするじゃないか。……」

糞便にむらがついていた鼠どもが、人の気配にぱつと散り、そのうちの一匹が李斯の足もとをかすめて、溝の穴に逃げ込んだ。

「ひどいもんだな、まったく」

と、李斯は鼻をつまんだ。

倉庫へ行っても鼠の姿は見かけた。

「しかし、この鼠はのんびりしてやがる」

人が近づいても、倉庫の鼠はそれほどあわてはしない。見ると、どれもこれも肥っている。上等の穀物を食べ、ゆつたりした建物に住んでいるのだから、それもあやしむに足りない。

ここで青年李斯はため息をついてひとりごちた。

「人間に賢と不肖がいるが、そのちがいはこの鼠のようなものではないか。どこにいるかという、ただそれだけの差だ。……」

やがて、彼は蘭陵（山東省）の荀子の塾に遊学した。

同時代の孟子は性善説だが、この荀子は性悪説であった。孟子は人間の本性を善とみて、それがいろんな要因によって曇るので、修養によって本性を取戻さねばならぬと主張した。だから道徳主義といえる。荀子は人間はもともと悪いものであるから、刑罰によってきびしくしめつけねばならぬと説く。法律至上主義なのだ。

荀子の塾で学んだ李斯は、さしずめ法学部の学生といえよう。同級生に韓非という青年がいた。韓の諸公子だが、どもりで弁舌はまるでだめだが、その頭脳は拔群で、さすがの李斯も彼にだけはかなわぬと兜を脱いでいた。

業を終えた二人に、荀子は言った。

「さて、もうあんた方二人には教えることはない。これからは実践じゃ。それぞれ国に帰って努力しなさい」

「はい」

と韓非は答えたが、李斯は、

「私は楚に仕える気はありません」と言った。

このとき彼は、便所の鼠と倉庫の鼠との違いを、思い出していたのである。

「ではどこへ行かつしやるのか？」

「秦でございます」

おなじ鼠が住むなら倉庫のなか、おなじ人間が仕えるなら強国のほうがよい。

「なるほど……」

さすがに性悪説の大家は、弟子の心が読めた。「では、秦の宰相の呂不韋どのに紹介状を書いて進ぜよう」

こうして、二人の同窓生は荀子の塾を去って、それぞれめざす土地にむかった。

韓非は帰国したが、韓王に登用されなかったので、失意のうちに著述に没頭することになった。彼のあらわした著作が、いまに伝わる『韓非子』である。

いっぽう李斯のほうは、恩師の紹介状のおかげでか、うまく呂不韋の舎人（家来）になった。

そのうちに、太后の醜聞事件にかかり合った呂不韋が失脚した。

おなじころ、韓の水工の鄭国という者が、始皇帝に灌漑用の水路を作することをすすめ、自分がその工事の監督をしていた。ところが、この男が韓のスパイであることが判明したのである。

秦の軍勢力が韓にむかわないように、秦のエネルギーをそのような大工事に放出させようという謀略だったという。

処刑直前に鄭国は、

「しかし、この工事が完成すれば、秦こそ大きな力を得るのです」

と説いた。そこで始皇帝は刑を免じて、鄭国に工事を続行させたのである。

ともあれ、他国から謀略工作員が潜入したり、呂不韋のような外国人の宰相が、宮廷をかきまぜたりする。そんなことで、秦人のあいだに、排外思想がにわかにたかまってきた。

秦王の一族や重臣たちは口ぐちに、

「諸侯の国の人で我が秦に仕える者は、たいてい出身地の主君のために、こちらで謀略に従事しているのですぞ。どうか彼らを追放していただきたい」

と要求した。

始皇帝もやむをえず、「逐客令」——外国人追放令を出した。

楚人である李斯は、むろん追放者リストに名をつらねている。彼は逐客令に反対する意見書を出した。

それは理路整然たるものであった。

秦の歴史から例をひいて、古来この国が列国出身者の力で栄えたことから説きおこした。

繆公のとき、西戎の由余、東宛の百里奚、宋の蹇叔、晋の邰豹、公孫支の五人を招いて彼らの努力によって覇者になることができた。

孝公は衛王の一族である商鞅を登用して、そのために民は富み国は強くなり、楚や魏を破って国土を拡張できた。

恵王は魏人の張儀を用いて、六国の合従を解消させた。

昭王は魏人の范雎の補佐をえて、諸侯の地を併合できた。……

——これを持ちまして、外国人がどうして秦の利益にならないといえるでしょうか？
と、李斯は問いかける。逐客令反対意見書はさらにつく。

——崑崙の玉、随侯や和氏の宝、明月の珠、太阿の剣、名馬緋離、翠鳳の旗……これら秦の国宝は、すべて秦の国産ではありません。

また秦の宮廷には趙の美女がいて、かなでられる音楽は鄭や衛のそれです。それなのに、人物を採用するときだけ、外国人を除外しようとしています。それなら、秦が重んじるのは、女色と音楽と珠玉だけで、人物は軽んじられていることにならないでしょうか？とすれば、秦は列国に人望を失うでしょう。人材は列国に散り、それはあちらの力になるだけです。……

皮肉なことに、李斯はこの「逐客令」に反対した上書で認められて、政治家として登場した。まず彼は法務大臣に相当する廷尉に任命され、彼はすべてが法律によって、機能的にうごく機構をつくり、皇帝独裁の基礎をかためた。

貴族体制の列国が、わいわい騒いでその日ぐらしのことしかできないのに、秦は敷かれたレールのうえを疾走できたのである。

対外政策では、おもに買収による攪乱に重点をおいた。

このころ、韓非の著書が秦にも入ってきて、始皇帝はそれを読んでいたく感激し、「ああ、なんとすばらしい論旨であることよ。この本の著者に会えて、つき合いができさえすれば、わしはもう死んでもよいぞ」とまで言った。

「それは私の同窓の韓非の著書でございます」と、李斯は教えた。

「そうだったのか。……」

始皇帝はとつぜん韓に兵をむけた、

欲しいものがあれば、そこへ兵を出すのが始皇帝のやり方であった。欲しいものが、土地であっても財宝であっても、そして人物であっても。――

秦の出兵を知って、韓は狼狽した。どうしても使者を送って、和を請わねばならない。

誰を使者にすればよいのか？

韓非は帰国以来、はじめてここで登用されることになった。だが、才能を認められたのではない。

――秦の実力者の李斯は、韓非の同窓であるから、話がしやすいであろう。

そんな人間関係を見込まれて、使者にえらばれたのにすぎない。

始皇帝はよろこんだ。思いどおりに韓非を手に入れたのである。

だが、李斯の心境は複雑であった。

彼と韓非とは、荀子の塾の同門で、おなじ分野の学問を専攻した間柄である。韓非のほうがずっとすぐれていることは、李スも認めざるをえなかった。いま韓非が秦で登用されたとすれば、一つの問題の論策について、自分との差があきらかになるのではあるまいか？そして、しまいは自分が退けられて、韓非が代わりに秦をうごかす実力者になるかもしれない。

李斯は始皇帝にむかって、

「韓非は私などのようなただの外国人ではありません。韓の諸公子であります。いま王は諸侯を併呑しようとなさっておられますが、彼は韓の利益ばかりを考えて、秦のためには尽くさないでしょう。これは人情というものです。いま王が彼を用いずに、久しく留めてから帰せば、将来に患をのこすことになるでしょう。ここは法によつて誅するのが、もつとも妥当かと思ひます」と説いた。

始皇帝は根が酷薄な性格である。我がものとなり切れない人物なら、いつそのこと殺したほうがよからうと思った。

「それもそうだな。……」

と、彼は答えた。

李斯は始皇帝の気が変わらないうちに、人をやつて韓非に毒薬を与え、自殺をせまつた。

始皇帝はあとで愛読書の『韓非子』を読み返して、

「やっぱり、この著者を殺すのは惜しい」

と思ひ直し、赦免しようとしたが、韓非はすでに死んだあとだつた。

韓非の死は、始皇帝の十四年（紀元前三三三）のことで、三年後に韓は秦に滅ぼされた。その翌年、秦は趙を攻めた。

趙の大臣郭開は、秦に買収されていた。

趙の名将李牧は堅守して、秦軍は一年にわたつて攻撃をくり返したが、どうしても抜けない。

秦は買収した郭開を使つて、李牧謀反の噂を流し、この手ごわい名将を処刑させることに成功した。あとはかんたんである。

十九年（前二二八）に、趙都邯鄲は落ちた。

邯鄲は始皇帝の生まれた土地なのだ。彼はみずからそこに乗り込み、少年時代をすごした町かどに立つて、

「つぎは燕だな。……」と呟いた。

あの困った母親が死んだのもこの年である。

秦の天下統一に、内政外文面で最も功績があつたのは李斯だが、軍事面での功臣筆頭は王翦であらう。

王翦は頻陽の人である。

山の南を陽、北を陰と呼ぶのは、日本でも山陽、山陰の用例がある。地名に陽の字があれば、山の場合はその南と思えばまちがいはない。しかし、川の場合はその反対である。洛水という河の北にあるまちが洛陽で、頻陽は頻水の北にあつた。西安の東北にあたる。

王翦は若いころ、叔父に連れられてよく旅行をした。叔父は材木商人で、いつも産地へ買付けに出張するのだった。

あるとき、山の谷川を利用する材木運送法を見て、王翦は考え込んだ。

「これは兵法に適用できるぞ。……」

若い王翦は兵法マニアであった。

流れをせきとめて池をつくり、そこに材木をうかべる。やがて堰を切っておとして、一挙に水を放つ。材木はうまく水にのって、山麓の部落まではこぼれる。

そこはもともと、小さな谷川で、材木を流せるほどの水量はない。

（すくない水も、溜めればふえる。ふえればふえるほど、水の勢いは強くなる）

王翦はそういうことを学んだ。

のちに秦の始皇帝に仕えて將軍となったが、王翦はこのことを忘れなかった。

ちよろちよろ流れる谷水をあつめるには、我慢づよくなければならぬ。王翦の兵法は、辛抱づよく待つことに尽きた。それでもわかるように、彼は用心深い男であった。

「わしには武安君というお手本がある」

將軍となつてから、彼は家人によくそう言った。武安君というのは、秦の昭王に仕えた名將白起のことである。

白起は武勲赫々の名將軍でありながら、晩年は一兵卒におとされたうえ、ついには死を賜つた。失脚の原因は、王の意見にたいして、あからさまに反対したことにある。

戦事について、將軍が意見を述べるのはとうぜんだが、王の意見と違つているときは、もつとやわらかく、遠まわしに言うべきであった。しかも白起將軍は、自分の意見が採用されなかったため、どうしても邯鄲が陥ちなかったとき、

「わしの計を聴かなかったからだ。どうだ、いまどうなったか。……」

と言つた。ざまあみろ、と言わんばかりである。それをきいて、昭王が激怒したのもむりはないだろう。

（心で思つていても、口に出しちやいけない）

王翦にとって、この先輩將軍の言行は、まさに反面教師であつた。

始皇帝が生まれ故郷の邯鄲を抜き、趙王を捕虜にしてその国を併合したのは、即位十九年のことである。この討趙軍の総司令官は王翦で、一年がかりの辛抱づよい攻撃の結果であつた。

韓はその二年前に、はやくも滅亡している。

（おつぎはこちらの番だ。……）

趙の滅亡でふるえあがつたのは、現在の北京一帯を領有していた燕である。いくら備えをかためても、燕の実力は、超大国の秦の前では、もはや螳螂の斧にひとしい。

——起死回生の策は奇道のほかはない。

燕の太子の丹は、そう考えた。

秦は李斯をはじめとする「法家」（法律至上の統制主義者）によって、きわめて能率のよい、独裁的な機構につくられていた。始皇帝という、戦闘的なリーダーの下に、一糸みだれぬ統制を誇っている。

奇道とは、始皇帝の暗殺である。

タカ派のリーダー一人をたおせば、それを頂点に積みあげられている組織は、あつというまにバラバラになるかもしれない。すくなくとも、燕への侵略の魔手を、しばらく遠ざけることはで

きるだろう。——これ以外に、燕の延命策はない。

こうして、燕の太子は刺客を養った。

荊軻という人物。——戦国の末期を飾るスターである。

テロリストがなぜスターなのか？

職業的な殺し屋ではなく、まったく私心のない場合、刺客もスターになりうる。

——士はおのれを知る者のために死ぬ。

荊軻はこの人生の綱領に忠実であった。

彼は太子丹の知遇に報いるだけのために、わが身をなげうとうとしたのだ。

いくら覚悟をきめても、秦王に引見を許されねば、刺殺のチャンスは得られない。

秦王に会うためには、相手のよろこびそうな手土産をもって行かねばならない。

第一の土産は、秦を脱走して燕に亡命している、もと秦の將軍樊於期の首。秦王はこの人物の首に、黄金千斤と一万戸の食邑の懸賞をかけていた。

第二に、督亢の地図。

督亢は燕領の肥沃な土地である。地図を献上するというのは、その土地を割譲する意味であった。

樊於期は、自分の首が役立つなら、よろこんで差しあげようと、いさぎよく自刃した。

督亢の地図は巻物になっていた。そのなかに、徐夫人の匕首という名剣を巻きこんだ。秦の宮廷では、王以外の者は武器を帯びることが許されないのである。

太子たちは荊軻を易水のほとりまで見送った。荊軻はそこで、

風、蕭々として易水寒し

壮士、ひとたび去って復た還らず

とうたった。

かりに秦王暗殺に成功しても、生還は万に一も望めないのだ。

暗殺そのものも成功しなかった。

秦王は贈られた督亢の地図をひらき、図の終わったところで、匕首があらわれた。荊軻はささずとびついて匕首をつかむや、秦王の袖をとらえて、その胸を刺そうとした。

心臓を刺す必要はなかった。匕首の刃には猛毒が塗られていて、毛ほどの創を与えただけで、相手は死ぬはずなのだから。

袖をとらえたのは失策で、むしろ腕をおさえるべきだったのだ。袖はちぎれて、うしろに身をひいた秦王は、間一髪、その危機をのがれることができた。

殿中なので、群臣は身に寸鉄を帯びていない。わずかに侍医の夏無且が、荊軻めがけて藥囊投げつけただけである。

始皇帝は剣を負って抜き、荊軻に斬りつけた。長剣と匕首とは勝負にならない。最後に荊軻は匕首を投げたが、ねらいはずれて、それはむなく銅の柱にあたった。

荊軻はその場で殺された。

激怒した始皇帝は、王翦に兵を授けて燕を伐たせた。秦軍は易水の西で燕軍を破った。

燕王と太子丹は、北京地方から遼東に退却し、秦軍は追撃したが、王翦は病気になって、途中で帰郷した。年老いて、この慎重居士はますます慎重になっていたのである。

このころ、王翦の息子の王賁が、すでに青年将軍として活躍していた。魏王を虜にしてその国を滅ぼしたのは、この王賁の軍だった。

遼東にたてこもった燕の残党を撃破したのも、若い将軍の李信という人物であった。

（右は『史記』の「列伝」に拠った。おなじ『史記』でも、「秦始皇本紀」では、これを王賁としている）

「いずれにしても、もう若い衆の世の中じゃ」

王翦はみんなの前でそう言った。

だが、心中では若い将軍を認めていなかったのだ。――

（なんの、いまどきの若いやつら、まだまだ戦争のおそろしさを知らぬわい）

若い将軍たちは、強い秦の大軍団で弱小国の軍隊にあたってきたので、戦えばかならず勝つものとはばかり思い込んでいた。

王翦はそんなものではないとおもう。

魏、韓、趙の三晋が覆滅され、燕は東に逃げ、斉も不振であるから、骨のある強敵は楚だけとなった。

「楚を攻めるには、どれほどの兵員が必要であるか？」

始皇帝は将軍たちに質問した。

李信は二十万と答え、王翦は六十万と答えた。

「王将軍老いたり。何と怯えていることか。」

始皇帝はそう言って、李信を総司令官に抜擢して、楚に兵をむけた。ところが、この軍団は、緒戦にこそ大勝したが、あとがわるかった。三日三晩ぶつつけの進軍で忽然とあらわれた楚軍の奇襲に、七人の師団長が枕をならべて戦死するという惨敗を喫した。

始皇帝は郷里の頻陽に引退している王翦のところへ、みずから出むいて詫び、再び出馬を要請した。

「では、六十万の兵をご用意願えますね」

王翦はなんども辞退した末、そう念を押しその条件で総司令官就任を承諾した。

始皇帝は王将軍をわざわざ瀟水のほとりまで送った。みちみち王翦は、美田、豪邸、園池を賜わりたいと、くり返してねだった。

「将軍、行きたまえ。どうしてそんなに貧乏の心配をするんだね？」

始皇帝は唇を歪めてそう訊いた。

「将軍は功があっても封侯にならないものです。ですから、王が私を必要としているこの機会に、私も王に園池をおねだりして、子孫のためにはかろうとしているのです」

「は、は、は、考えておく」

と始皇帝は答えた。

王翦は函谷関に到着してから、五回にわたって都に使者を派遣し、善田の下賜を乞うたので

ある。

「毫碌して欲げけじゃ。なんとしつこい」

と、側近の人たちは眉をひそめた。

だが老將軍王翦は、腹心の者にだけは、自分の本心をうちあけた。

「秦王は猜疑心がつよく、なかなか人を信じない。考えてもみよ、いまわしは六十万の兵を与えられた。これは秦の全軍隊といつてよい。秦王の手もとは、からっぽではないか。わしは謀反をおこして、成功するに足る力をもっている。秦王がわしを疑いだせば、ことは面倒であろう。だから、欲張ってねだるようにみせかけておるのじゃ。秦の領土に大きな財産をのこしておけば、それに満足して造反などせんじやろうと、秦王にそう思わせねばならんからう。……」

この対楚戦でも、王翦は慎重をきわめた。楚がしばしば挑戦しても、墨壁をかためて出撃しやうとしない。城内では兵士たちがスポーツに興じたり、トルコ風呂に入ったりして休養している。

王翦は若いころに見た、材木流しの場面を思い出していた。

水はたくさん溜めるほど勢いが強くなる。

休養の足りた兵ほど強い。

こうして、兵の意気が最も旺盛なときを見はからって、どつとセキを切っておとした。

楚軍は壊滅し、一年後に楚王は虜となった。

これが始皇帝二十四年のことで、翌年、遼東に逃げ込んだ燕王も滅び、さらにつぎの年に、王賁が斉王をとらえた。

六国はすべて滅びた。

この年、秦王の政は、はじめて始皇帝と称したのである。紀元前二二一年のことであつた。カルタゴの將軍ハンニバルが、アルプスを越えてイタリアに進撃したのは、この三年のちのことだつた――。